城下町探訪42

2010/1/21

しょうあんじ 生安寺と生安寺小路

1 功徳山 良忠院生安寺

現在蟻 $_{5}$ 崎 $_{4}$ – $_{5}$ の「生安寺」は江戸時代には本町二丁目にあった。今回は生安寺のたどった経過を追いながら城下町の形成過程を見てみたい。

「旧松本市史」によれば並柳に草庵案を結び念仏三昧を送っている生安という僧がいた。 文安4年(1447)石州(石見国)津和野の然阿良忠という僧があり、善光寺詣での途 中この草庵に滞在した。然阿は生安に勧めて草庵を良忠院となしひたすら念仏すると往生 できると説いた。その後、天文22年(1553)浄誉上人順故和尚が寺を建て良忠・生 安の名を留め「功徳山良忠院生安寺」と号した。

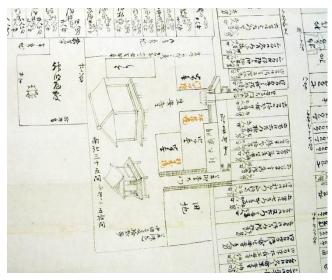
七世浚蓮社英誉上人の時**深志城主島立右近貞永**が深く上人に帰依して城東泥町(地蔵清水)に寺地を与え並柳より寺を移し天照山良忠院生安寺と号した。浄土宗知恩院末寺であった。

ところが、**小笠原貞慶**が城郭及び城下町を整える際、当時まだ三の丸の内部にあった町家や寺院を女鳥羽川以南の地へ移した。そこを信府統記は次ぎのように記しています。「天正十三年より今の宿城地割りして、同十五年までに、市辻・泥町辺の町屋残らず本町へ引き移し・・・**浄林寺**を林村より伊勢町へ引き移し、**生安寺**を泥町から本町へ移し、**瑞松寺**は今の飯田町にありしを宮村に移す・・・」

すなわち、三の丸以内を武家地として整備したのである。この時、飯田町にあった瑞松 寺は宮村町東に移され生安寺は本町西側に移されたのである。前回見たように寺院の周辺 への移転が領主によって行われていることが分かる。

本町二丁目に移った生安寺は境内42間四方で寮舎として摂取院・門正院・林正院をもっていた。末寺は安原摂取院・博労町十輪院・横田念仏寺の三寺であった。

右地図は「元禄期松本城下絵図」である。境内に本堂と薬師堂が見える。この薬師堂は松本十二薬師の第一番札所になっている。この薬師について信府統記は「庄内に薬師として一字の堂あり、一説にこの本尊いにしえ(信濃国司)源重之が信濃に下りし時、庄内組清水の里に安置せられしが、その後この地に移されたという」と述べている。正保元年9月3日、薬師堂より出火



したが本尊は無事運び出された。

生安寺に伝わる石の地蔵尊がある。小笠原貞慶が 泥町・市辻辺の町屋や寺を移動し後、井戸を掘った とき土中から石の地蔵尊が出土した。それが生安寺に 祀られた。現在も生安寺に祀られている。

地蔵尊には「文治四年九月四日」と刻されている。 文治4年は鎌倉時代1188年である。

明治初年の廃仏毀釈により廃寺となり薬師如来、地 蔵尊は極楽寺に預けられた。廃寺となった後、建物は 本町女学校(第四番小学松本女学校)として使用され た。明治16年薬師如来と地蔵尊を極楽寺より迎えて 寺の復興に着手し、安達達順和尚は法弟元隆をして



生安寺の地蔵尊

明治31年遠州小笠郡大須賀村遍光寺の寺籍を得させ、明治33年生安寺の名に服し曹洞宗に改宗した。昭和37年、現在の蟻ヶ崎の地に移転した。

2 生安寺小路

生安寺に通ずる小路が生安寺小路である。「元禄期松本城下絵図」は後年生安寺小路と呼ばれる所を玄知小路と記している。「享保十三年秋改松本城下絵図」には生安寺小路と書かれ生安寺前本町入り口から東へ宮村町まで。玄知小路は宮村町から源地の井戸の間の小路を指すように記載されている。

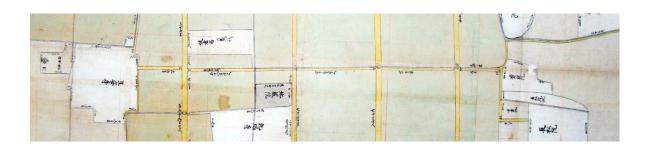
生安寺小路は道幅1間4尺であった。

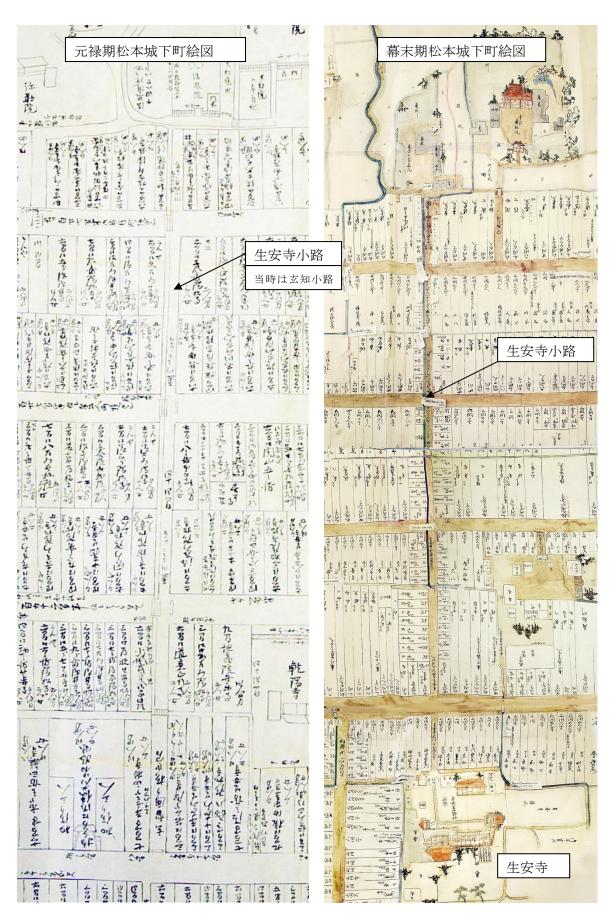
「享保十三年秋改松本城下絵図」の生安寺小路

「元禄期城下町絵図」の生安寺小路の両側の家並についてみると玄関が向いているのは 飯田町、小池町、宮村町の通りに面しており、生安寺小路には向いていない。

所が幕末期松本城下絵図の生安寺小路の地図を見ると生安寺小路に面して町割りが変わり細かく区切った店舗が生安寺小路に面して造られていることが分かる。

現代風に言えば生安寺小路商店街が形成されている。(次頁地図参照)





○生安寺小路と雛市

生安寺小路は現在の高砂町である。 「有名なる古語、高砂の屋上の松に基 づき、松本に関めるなり。」と旧松本市 史にある。高砂町は雛人形の町として 有名であるが「旧松本市史」によると 「松本雛市」は高砂町に限られていた。 旧暦2月20日頃から3月2日まで、 新暦になってからは3月20日から4 月2日頃大いににぎわった。

生安寺小路の雛商の元祖は「角佐



原」」で、その次が「鍋林」それから「塩田屋」である。「角佐原」の開業は文化・文政頃。 「塩田屋」の商売開始が天保4・5年頃である。(「鍋林」の創業は金物鋳造業とし享保 11 年とされている。)鍋林・塩田屋が雛の開拓に勤め両家を中心に同業者が増加していった。 松本雛の名称で好評を博し漸次盛んとなった。

しかし、この時代は西京方面から仕入れた雛の販売が主流で松本では宮村町辺で僅かに 絹着雛や張子雛が造られていたにすぎない。

押絵雛の起源は天保年間頃で宮村町辺の人々の手内職として始まり、維新後は廃藩後の 士族の内職として盛んになり、明治 15・16 年頃には顔描・顔張り・胴張り・下絵描き等分 業形態が整い県内のみならず他県へも移出された。明治 20~30 年代が最盛期で大正以降は 殆ど造られなくなり京人形の雛が主流となった。昭和初年には高砂町の雛人形業者15・ 16軒、臨時に開く店が5・6軒あった。(以上「旧松本市史下(昭和8年刊)」415p~418 pによる)

※「よみがえる城下町・松本」 郷土出版112p・113pに雛職人・雛人形のことが詳しい。

※生安寺の移転

